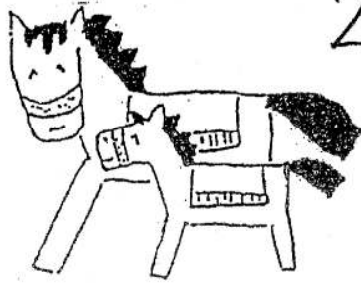


お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ホッリホッリ

21年 3月 NO.172



〒 760-0044

香川県高松市御坊町2-2

高松保育園内 地域子育て支援センター

TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857

<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～ 3月のプログラム ～お気軽にどうぞ～

3月 3日	火	ひなまつりにおいで 10:30～11:30	お子さまの成長をいっしょに お祝いしましょう。
3月 14日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って あそびましょう。
2月 14日	土	リフレッシュ講座 14:00～16:00	音楽にあわせて体を動かして みましょ。
3月 18日	水	香川みずゞさんの会 14:00～16:00	矢崎氏や上村ふさえ氏(みずゞさんの娘) の近況報告もあります。
3月 24日	火	健康・育児相談 11:00～12:00	小児科医師にゆっくり 相談できます。(予約要)
3月 28日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も育児体験に おいで下さい。
3月 29日	日	矢崎節夫氏講演会 13:00～15:30	高松市市民文化センターにて。 ロビーでパネル展、3階で講演会です。

園庭開放 (13:30～15:00)

3月 5日(木) 「わはは広場」の親子参加
*雨天時、出前保育

育児相談 (月～土) 9:00～18:00

しつけや子育てについての悩み、
保育園生活、入園・見学について
の相談もどうぞ。

桃の花びら

みじかい、みどりの
春の草、
桃がお花をやりました。

枯れてさみしい

竹の垣、
桃がお花をやりました。

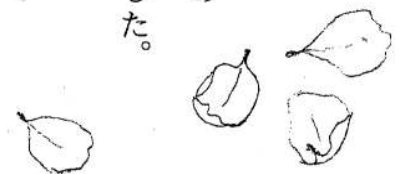
しめって黒い

畑の土、
桃がお花をやりました。

おてんとさまは
よろこんで、
花のたましい呼びました。

(草のうえから、
はたけ
畠から、
ゆらゆらのぼるかげろうよ。)

金子みずゞ童謡全集より



21年4月から新保育所保育指針で保育がスタートします。

各保育所の実情に応じて創意工夫し、保育所の機能及び質の向上に努めるよう法定化されました。当園でも職員間で話し合いを重ね、当園の保育目標「いのちを大切にし、正しく生きぬく力を持つこども」を柱に養護と教育を見直す作業をすすめています。そんな時に飯田和也氏の「一人ひとりを愛する保育」という著書の中に、次のような文章を見つけましたのでご紹介します。

おおらかに見守る

ある時、スクリーンで、保育現場のシーンを見て、保育科の学生が次のように言ったことから、私は保育のあり方について深く考えさせられました。

それは、先生が跳び箱の指導をしている時「もっと前に手をつけて」「がんばれば誰でもできるようになるから」と子どもに言い、さらに「手をここにつくの」「もっと前」と指導している場面です。このように強引にやらせているような保育の場面を見た学生は、自分の保育園時代を思い出し、「今でも跳べなくて泣いていたこと、先生の鬼の顔しか覚えていません。そして残されてガンバレ、ガンバレと声をかけられたが運動会の時も結局跳べなくて、跳び箱に『劣等感』を持ってしまいました」というものです。

また、他の学生は「先生、私はあんな保育園には絶対に自分の子どもを入れたくない。私も保育園時代、雪の日でも全員が半ズボンでマラソンをするという園でした。みんな冷たくて、寒くて泣きながら走っていましたが先生は、ただガンバレ、ガンバレと言うだけでした。私はどんなにがんばってもいつも最後でした。あんなにつらいことはなく、いくらがんばってもできないことはしかたないと思い、マラソンと聞くだけでももう走りたくないと一生傷がついてしまいました。

このような保育園で育ち十数年経った学生に教えられたことは、「保育園は訓練や鍛錬をすることに中心をおいた保育をするのではない」ということです。「跳べた満足感、走れた喜び、もっと跳びたい、もっと走りたい」といった心情や意欲を育てるということです。保育園はこのような一生心に傷がつくような「劣等感」を植えつける場所ではありません。今までの保育の方法や形態を見直すことのひとつに、このような訓練や鍛錬、身体を鍛えることにとらわれたり、技術の習得を人より先にさせることや磨くこと、人より早く話せることではなく「跳び箱が跳べた満足感を味わう」「マラソンで最後まで走れた喜びを味わう」「食べれた充実感を味わう」といった「心を育てる」保育を大切にすることがあります。

それには「ガンバレ」「ガンバレ」といった言葉かけでは、「ガンバロー」とする意欲に結びつかない場合があることを理解していなければなりません。子どもの目になって物を見たり、赤ちゃんを見たり、友達を見たり、先生を見たり、子どもの耳になって物の音を聞いたり、友達の言葉を聞いたり、先生の話聞いた

り、子どもの手になって物をさわったり、物を作ったり、子どもの足になって走ってみたり、歩いてみたり、動いてみたり、子どもの心に保育者になることが大切です。

子どもにがんばること、忍耐することなどを気づかせることは大切ですが、すべてにガンバレ、ガンバレといった言葉かけでは、子どもの心に通じないことがあるということを保育者は肝に銘じておかなければなりません。何を子どもにがんばらせるかということ「子どもの状態」によって使い分けることです。

また、すべての子どもをがんばらせるということではなく、乳幼児にとっては、できない時も、したくないこともある、ということを理解することが大切です。したがって、「受け入れる・見守る」といったことも大切な保育方法となります。

いつもいつもがんばらなくてはといった心では、失敗をした時に子どもが挫折感に陥ってしまうということにもなります。時には「失敗してもいいよ」「そんなにがんばらなくてもいいよ」といった心づかいで見守り、失敗をする時もあるけれどがんばることも大切だということを感じさせることも保育の中で大切なことです。保育者が子どもにいつもがんばらせるというのではなく、「大らかに」見守ることが大切であり、「ゆったり」とした心で保育をすることです。



家庭のことを保育所まで持ち込まない

保育士は身体の調子を整える努力を惜しまないことが大切です。

保育所に朝来た時に家庭で「姑とのケンカ」「夫婦での意見の食い違い」「親子ケンカ」「悲しい出来事」などが生じたことをそのまま持ち込んでしまい、情緒的にイライラしたり大らかに見守ることができない状態で保育をする場合があります。また、自分がつらい、悲しい時に「がんばらなければ」という心が強くなり、乳幼児に対してまでも「頑張らせねば」といった気持ちでやらせてしまうといった保育をする場合もありがちです。

家庭では、母親であったり、妻であったり、娘であったり、一人の女性であったりします。しかし、玄関を出て保育所に入ったら保育士としての生き方にケジメをつけることです。また、家庭の中まで「保育士の顔」で子どもに文句を言ったり、ご主人に言葉をかけたり、姑と付き合ったりして「問題な行動」を取る場合があることには注意しなければなりません。家庭生活が情緒的に安定していることが保育をする上で重要であるということは言うまでもありません。家族全員が「愛し愛される喜び」の中で生活ができて、人に対して愛する喜びが感じられ「保育する満足感」を味わうことができます。このような「心の安定」が保育をする時に、ゆったりとおおらかな心になり乳幼児と触れ合うことができるでしょう。



絵本紹介

「ヘンリー・ブラウンの誕生日」(日本語版 鈴木出版)

エレン・レヴァイン「作」、カディール・ネルソン「絵」、千葉茂樹「訳」

ほんとうにあったお話 * * * * 著者からのメッセージ

1800年代のなかごろ、アメリカには400万人もの奴隷がいました。奴隷はテーブルや家畜、荷馬車などおなじように、人間ではなく物あつかいされていました。歴史家によると、6万人から10万人の奴隷が、自由を求めて逃げだしたといえます。彼らは「地下鉄道」を通じて逃亡しました。

「地下鉄道」とは、地下鉄のことではありません。奴隷制を認める南部から、認めない北部へと逃げる奴隷を、手助けする組織のことをいうのです。逃亡奴隷は荷車にかくれたり、馬に乗ったり、歩いたりして森や沼地をぬけ、こごえるような真冬にも川をわたり、何百キロという道のりを乗りこえたのです。自由を手に入れるために、あらゆる手段をつかいました。旅のとちゅうでは、「車掌」や「駅長」とよばれる人たちの助けをかりました。

ヘンリー・ブラウンは安全な世界へ運ばれることを信じて、箱に身をひそめました。ヘンリーが持っていたのは、空気穴をあけるための小さな道具と、わずかな水と2,3個のビスケット。おそれていたのは、ただひとつ、見つかってつかまることだけでした。

ヘンリーはバージニア州リッチモンドから350マイル(およそ560キロメートル)はなれたフィラデルフィアまで運ばれました。かかった時間はおよそ27時間。そのあいだ、からだが入るほどの木箱のなかで、声も立てず、トイレにもいかずにじっとたえぬいたのです。



ヘンリーの物語はアメリカやヨーロッパの新聞で大きくとりあげられました。自分を小包にして、自由の地へと送り届けたヘンリー・ボックス・ブラウンは、地下鉄道で逃亡した奴隷のなかでもっとも有名な人物になりました。

***コールデコット賞、オナー賞受賞**

この賞はアメリカ図書館協会が選定するもので、世界三大絵本賞の1つとなっている。

この物語は、人間が物と同じように売買され私物化されていた時代のことですが、現代は世界のどこかで戦争があったり、物欲にとりつかれお金や自ら発明したテレビやパソコンやケイタイに依存し、地球環境も悪化しています。現代人も物やお金にしばられた不自由さと不安定さは、箱の中のヘンリー・ブラウンではないかと深く考えてしまいます。(堀)